

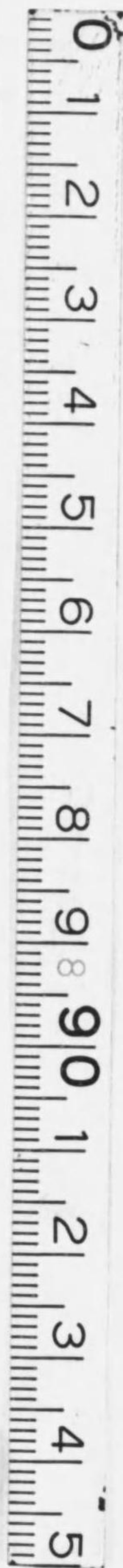
特 249

68

先覺者

渡邊華山

鈴木清節著



始



特249
68



鈴木清節著

邊
華
山

華山叢書出版會版





華山生先肖像
椿山筆

述懷之歌 華山先生筆

こゝろのみて世をほろひてか
はのちをよむる事とわが
たふす事とわが
針の理

一



黃雀窺蛛之圖 華山先生筆



華山先生筆 卷圖山水



鷹見泉石畫像 華山先生筆



牡丹蜂之圖 華山先生筆

月下鳴機之圖 崑山先生筆



序

崑山渡邊伯登先生に關する著書は二十幾種の多きに及んで居るが、先生の全貌と其四十九年間の曲折終始を明確に記述して居るものは崑山全集である。それは先生自身の筆になつた自叙傳として經過並に其心境を有りの儘率直に明記して居ると、並に師友門人等關係者の手翰記録等を網羅したものであるからである。崑山全集は私の編纂したもので、手翰類以外の遺稿文書は概ね輯録したと信じて居ます。此全集の資料に依つて研究して見ると、先生は多くの偉人傑士哲人の中に於て、最も卓抜なる識見と極めて高い天分と人格と實行力の持主として卓出して居る上に、更に時代が時代であつただけに其國際觀、文化觀等に關する先覺者的識見は高く時流を抜ひて國策國定の上に貢獻すべき多大の抱負と經綸とを有して居たものと信するのである。安政より慶應の時代に於ける識者憂國者の内には

先生と同じく相當進んだ意見策論の持主も在つたが、それは時代の力が多分に加はつて居る。天保前若くは天保の初期に於てあゝした觀察と之に對處するの抱負を把持して唱道し實現を期して居た處に先生の先覺者としての價値を認むるのである。併し私は先生の全部を批判し紹介せんが爲めに此著に筆を染めた譯は無く、遺稿記録の輯集である崑山全集と相對して簡明に先生其人の一生を記述して、後進子弟が先生を知り、先生を検討し以て其高風大節に薰染し、完全なる人格修養の一端ともならんことを冀ねこう次第で、近かく崑山神社の創建を見るべく豫期されて居る折柄、多少なりとも先生の片鱗を紹介し得れば幸ひなりと思惟すると同時に、先生の全部を検討し盡せる大著の出でんことを希望して已まない者である。

昭和十六年二月

著者識

目次

血統と閑歴	一
其最後と母	八
水火の鍛練	二
卓拔な稟性	五
人間としての偉大	四
主君への忠烈	六
國家に對する先憂	八
至孝と友情	一〇
門人に對する篤誼	三

經世濟民の經綸……………三三
 古今獨歩の畫聖……………三三
 繪事と治道……………三三

附 錄

崑山と耀藏の詩……………三七

圖 版

崑山肖像……………一
 述懷之歌……………三
 黃雀窺蛛之圖……………四
 山水圖卷……………五
 牡丹蜂之圖……………六
 鷹見泉石畫像……………七
 月下鳴機之圖……………八

先覺者 渡邊 畢山

鈴木清節著

血統と閱歴

渡邊伯登諱は定靜字は子安通稱登畢山と號す。其居所の號を寓繪堂後に全樂堂と稱し、田原幽居後には隨安居士、金敦居士、昨非居士、觀海居士などとも稱した。其中興の祖田代圖書は越後家の士で祿八百石、五世の祖權右衛門定重に至り故ありて浪人し、應て三河國渥美半島の田原藩主三宅康勝に仕へて祿百石五人口を給せられたが、せめて三百石にもならねばとて、母方の氏渡邊を名乗つたと傳へて居る。

三宅氏は今の三宅子爵家で徳川氏譜第の家柄である。三宅康貞關ヶ原に殊功あり一萬二千石の大名に封せられ碧海郡梅ヶ坪より渥美郡田原に移封、康勝は中興の祖康貞より四代目の藩主である。

定重の子市郎兵衛留守役となり、其子定泰用人に進み、用向加判を命ぜらる。嗣子鈴、定泰の後を襲ひたるも病の爲め早世し、他に男子無きを以て女子に同藩の士平山郷右衛門直時の二男定延を迎へ婿養子とし相續せしめたが定延も亦子無きを以て遺命し、兄平山郷右衛門直儀の第三子定通を養子とし家を繼がしめた。定延には女子も無かつたので、永井大和守の家臣河村彦左衛門の女榮を娶る。實に華山の兩親である。されば血統は平山氏であつて、越後田代家の血統は斷絶したものである。平山氏は世々三宅氏に仕へ家老の家柄であり、純田原人として武勇を以て聞へて居た。

定通字は叔澤市郎兵衛と稱し、巴洲又半軒と號した。學を好み、藩儒高見星阜に學び、武人にして學徒であつた。三宅氏八代康之の時代より出仕し、康武、康邦、

康友の四代に歷仕し、側用人より家老末席に進み、多年の宿痾に苦しみつゝ、致仕を許されず、病間には強ひて勤務に服し居たるが、文政七年八月九日六十歳にして逝去す。

定通五男三女あり。長は伯登華山、二男定意、僧となり、二十八歳にて武州熊谷宿にて客死。三男喜平次、永野伯耆守の臣堀田氏の養子となり、文政十二年病没。四男助右衛門岡崎藩士中山氏を繼ぎ、二十七歳にて死去。五男定固、字は季保、號は如山、書畫を能くし、華山子の如く愛し、多大の望を囑して居たが、二十六歳にて死去す。華山の弟妹多くは青年時に早世したが、獨長女もと桐生岩本氏に嫁し、孝を以て聞へ、幕府より表彰せられ、七十三歳の長壽を保つた。二女まき、永井左衛門の家臣佐藤藤助に嫁し、二十二歳にて病死。季女天す。

華山は寛政四年九月十六日江戸半藏門外の三宅藩邸の館舎で生れた。藩邸は今の陸軍省の敷地になつて居る。三宅坂は藩邸前の道路で、自然に人の呼びなした稱呼である。父定通が留守居役として歴代の藩主に近侍して居たので、

華山は三歳の時から當時の藩主十一代康友の奥に出入し康友並に夫人に鐘愛せられ、五歳の頃から夫人お里歸りの時など毎時も召連れられるといふ格外の境遇に在つた。

八歳の時世子龜吉の伽を命ぜられ毎日朝四ツに出仕して九ツに下かり、八ツに又出仕して夕方まで御相手を爲し、習字讀書謡曲など世子同様稽古に精進したものである。然るに家には傘も無く雨の日には蓑笠で出仕したといふ極めて矛盾した生活状態であつた。

文化三年三月世子龜吉病死し、其弟元吉世子となる。華山は前同様世子の伽を命ぜられた。元吉は十二代康和である。文化五年康和の父十一代康友の近習を命ぜられ五月駕に従つて藩地田原に到つた。華山時に年十七、生れて始めて郷國の地を踏んだのである。

其翌年康友易簣し康和後を受くるや同じく近習として勤務に服した。

華山は少年から文鏡平山直員に畫の手ほどきをして貰ひ、讀書は高見星阜に

依つて教を受けた。

享和三年華山十二歳の時備前世子の先供に觸れ理不盡な打擲を受け地に倒るゝまでの暴虐に逢ひ奮然立ち上がり、我れも同じ年輩である。彼れも人なり我れも人なりと之より天下の第一人者となり名を揚げ家を興して此耻辱を雪がねばならぬと決心した。それには儒者になり學問により出世するに如かずと考へたが、同藩の知人高橋文平と師高見星阜の勧めに依り一轉して書を學び以て窮極の家計を助くべしと決心するに至つた。當時渡邊家は夫妻子供十人と祖母尙存生中で一家十一人の家庭であり物價昂騰の時代とて疊建具の外は總て質屋に預けても其日の食糧を辨じ兼ねるの赤貧であつた。

華山は初め白川芝山の門に入り後金子金陵に師事したが、天稟の畫才と熱烈なる精進とは非常に急速の進歩を爲して二十歳前後の時既に相當専門家の壘を摩するまでの腕前に爲つて居た。其作品を見れば當時は應舉の畫風に模するの傾向もあつたが一轉して宋元南畫の領域に直入することゝなつた。

文化十一年二十一歳で納戸役、文政三年使番格、同九年二月取次役、同九月側用人、天保三年五月年寄役末席に昇進時に四十歳。

天保十年五月十四日奇禍にかゝり入獄、同十二月二十九日判決、於在所蟄居の申渡を受け藩地田原に檻送、廳がて住宅を給せられ幽居二年、門人福田半香、華山の窮を救はんが爲めに江戸に於て畫會を催し、落款の年月は奇禍前のものにしてあつたが、華山の新作品殊に有数の傑作が出陳されたので江戸の人氣を集中し評判になつたと同時に蟄居謹慎の身として不謹慎なりと藩内俗論黨殊に華山反對の権力派などが種々なるデマを飛ばすに至り、此事華山姻戚の者より華山に通報するあり、華山は累を藩主に及ぼさんことを憂慮し、天保十二年十月十一日自刃し巨星忽焉として地に隕ちた。年四十九。

其後再三藩主より幕府に對し赦免を嘆願したるも赦されなかつたが、明治元年三月十五日に至り幕府目付衆の名を以て赦免の沙汰あり、田原城寶寺に墓碑を建て、『文忠院華山伯登居士墓』の十字を刻した。華山の生れた寛政四年は丑年

であつたが、其終焉の天保十二年も亦丑年であつた。

其最後と母

崑山の父定通は武人にして學徒であり、廉直恪勤而かも二十年の宿痾に苦しみつゝ、勤務と閒病の忍耐力は異常のものであつた。そして母榮子に至つては賢婦人にして烈女であつた。此病夫と一家十一人の赤貧生活の間に在つて崑山を教育した操守と耐力とは到底尋常一様の女性に見ることの出来ない卓越したものがある。此母は子供には蒲團を與へても自分は疊の上に着の身着の儘のごろ寝で永年を過ごしたといふ犠牲的精神と不拔の氣象の持主であつた。此母の仕打が聰明で俊敏な子供に如何なる感化を鏤骨銘肝したであらうことは推測に難くない。崑山の血脈と園境とは超弩級ののものであつた崑山の自決前、母は之を覺り其輕舉を誠しめ嚴に監視して居た。十日に自決すべく遺書を認めたが果さず十一日に至つたのは之が爲めである。

天保十二年十月十一日、此日は天晴氣清の好日和であつた。朝の來客の歸つ

た後、邸内を漫歩して居た崑山は廳がて屋後の物置小屋に隣りせる機織部屋で機を織つて居た下女梅(本名安田峰)に對し機は何時濟むかとたづねた。梅はただで御座いますと答へるとそうかと立去つて座敷に入り机の前に端座した。老母は隣室に在り聊か意を安んじて居ると崑山は吐嗟に障子を明けて地上に出で疾走して屋後に向つた。素破とばかり老母は其反對の側より駆けながら梅に聲をかけたつゝ、小屋に到つた。到れば既に自刃し了つて居た。此小屋は榎小屋と稱し前住者大藏永常が白砂糖蠟などを製した所である。梅の談によれば崑山は刀を兩手に捧ぐる如くして床上に俯伏し血は淋漓と流れて居た。老母は無言の儘襟髪を掴かみぐつと引起して御覽になると腹を深く切つて喉を貫ひて死んで居られた。老母は其儘元の姿に直し「梅井上へ」と一言仰せになつたと。井上とは常に出入りして居た井上友三青年である。無言の儘涙一滴落さず毅然として一絲紊れざる老母の態度は如何に烈女にして女丈夫であつたかと思はれる。時に老母年七十、此母にして此子あり、此兩親にして此偉材を産

す。偉人の存在豈偶然ならんやの感を起さしめる。

水火の鍛練

崋山生れて三歳藩主の奥に入り藩主夫妻の鐘愛甞ならず既に大名家庭の人である。八歳世子の御相手を勤め總ての教育躰は世子同様之を受け純然たる大名教育を受けたのである。そして家庭に歸れば雨傘すら無く衣食給し難き貧民生活である。大名貴族と赤貧士族の家庭を朝夕往來して水火兩極の間に鍛練陶冶を受けた百鍊の鐵の如きは彼れの半生の圓境であつた。寛厚雍和の上流士人の風尚を有し一面秋霜烈日の氣魄を有し仁慈と忠烈の兩面を兼ね備へて神技古今獨歩の妙を極めた彼れの人格と精進力とは眞に非凡のものであつた。崋山は江戸に生れて江戸に育ち江戸の教育を受けて發達したもので、換言すれば爛熟した江戸文化の所産である。そして西力東漸の世界的國際情勢の怒濤は彼れを驅つて憂國慨世の愛國者と爲し、蘭學者を友人知人中に多く有した結果は之を利用して世界通となり開國進取の先覺者となつたのである。

卓拔な稟性

如何に陶冶鍛練を施すとも稟性魯鈍柔弱懶心弱く忍耐力の乏しき人であるなれば其効果は知るべきで大人物には成り得ないのであるが、崋山は最も良き頭の持主として聰明穎敏忍耐強く観察は透徹にして實行は果斷英決であつた。少より大人の風あり、學を好み書畫に巧みに能文の才あり、詩歌をよくし行くとして可ならざる無く、俊邁の氣宇眉目の間に顯はれ、人と敢て争はないが又徒らに人に屈するものでは無く、貧苦の間に書を學び書を読み儒學に關しては佐藤一齊、松崎懺堂など一流碩儒の教を受くる二十年、藩政藩務に盡瘁し家庭の難關を處理しつゝ、四十六歳藏書を擧げて藩主に献じた進書目録を見れば實に二百九十七種一千四百十冊の浩瀚に及んで居る。珍書奇書重要な書籍が少なくないが、而かも世の所謂骨董藏書の類では無く、總て讀破したものなるに於て頭腦の明晰卓拔唯々驚くの外はない。十五歳より四十九歳の終焉に至る二

十五年の間蓋し一分間も徒費したことは無かつたであらう。其海外知識に就ても一を聞いて十を知る明識は蘭學專攻者をして嘖然たらしむるものがあつたといふ。

人間としての偉大

崑山は高潔の人格者であり、謹嚴にして寛大博愛にして清廉其人に接する温和親切能く語り能く聴くの人で、訪客室に満ち長時間に亘るも更に倦怠の状無く、知識階級と然らざるものを問はず常に悦んで其周圍に集まるの風があつた。人に對して小言を言つたことが無く家族や下男下女などに對しても叱つたことが無かつたが、それで居て對談者に於ては自然に大磐石を以て頭上より壓倒せらるゝが如き重壓を感じたとのことで、卓犖奇異眼中人無き高野長英をして『吾生れて三十五年未だ曾て如此偉傑に接したること無し』と嘆嗟せしめ、初對面より傾倒して終に死を共にするに至り、一代の巨匠谷文晁をして僅かに二十六歳の青年崑山に對し是亦初對面より崑山先生と敬意を表せしめ、傲岸一世を睥睨するの觀を爲して居た藤田東湖の如きも始めて崑山の訪問を受くるや殷懃鄭重相傾蓋せるの狀崑山の隨行者を驚かしたと傳へて居る。崑山の人物

の如何に高くして大なりしかを推測することが出来る。そして其偉大なる表現が國家社會藩政並に世界觀と書畫詩文各般に亘つて發揮されたものが即ち崑山の全人格である。

主君への忠烈

崑山少年時より二代の世子の御相手として忠實に勤務せること言ふまでもなく、長じて次第に累進し文政九年二月十六日取次役となりし時、藩主十三代康明卒去、康明の弟銅藏世子として居たにも拘はらず、家老等相圖り姫路酒井雅樂頭の第二子十七歳を養子に迎へ藩主と爲す、十四代康直がそれである。小藩にして極度の財政窮迫状態に在つた田原藩は康直五萬兩の持參金に依り藩財政の窮を救はんと、極めて低級なる俗想の下に三宅家の血統を犠牲に供したのである。崑山之を非とし同志と共に極力反對したが力及ばず、終に實現を見た。銅藏は巢鴨公友信、友信は崑山の指導誘掖に依り漢學の外蘭學を修め、終に蘭學社中の中心人物となるに至り、輸入蘭書の新刊物は概ね之を購入し、春山長英三榮等と兵書其他を翻譯し、我が兵學界並に文化に貢獻せる偉功、尠ならず、昭和十五年に至り贈位の恩典に浴したのであつた。康直世子を定むるに當り其實

子を世子たらしめんとするは人情の常であり、輿向に於て殊に其情深く一面に於ては藩主の意に迎合せる俗物家老等の態度も亦其傾向を助長し、將さに決定を見んとするまでに至つたが、此時家老の末席に列せる崑山は斷乎として之を非とし、非常なる決心を以て、藩主の反省を促がし、終に友信の長子康保を立て、世子と爲すことを得た。之より先、崑山は藩主の命に依り三宅家々譜の調査に着手して居たが、三宅氏は南朝の忠臣兒島高德の後裔である。崑山は南朝忠臣の血統は斷じて絶つべからずと力説して、康直を動かしたのであつた。崑山自決の時、長子立に宛てた遺書に「俄死すとも二君に仕ふべからず」と鐵石の如き赤心を明記してあつたが、崑山が終始一貫して藩主に盡した忠烈は此赤心の發露であつた。

國家に對する先憂

崋山の手に成れる『吠舌或問』『西洋事情問答書』『和蘭風説書』『慎機論』等、いづれも憂國の至情に出で、世界情勢と東亞關係に於ける情況に通せる第一人者として、井蛙管見の幕府當局を警醒せしむべく、百方苦慮努力せる片影であるが、大聲俚耳に入らず、學閥思想上の反對感情と江川太郎左衛門に對する反感の爲め之を羅織せんが爲めに、蕃社に手入れを爲すべく其頭目を以て目ちれて居た崋山を檢舉するに至り、何等罪狀無きに拘はらず、筐底の未定稿、慎機論序文の草稿に『嗚呼、今是ヲ在上ノ大臣ニ責メント欲スレトモ、執袴子弟、要路ノ權臣ヲ責メント欲スレドモ、賄賂ノ侍臣、唯是レ心アルモノハ、儒臣、儒臣亦望淺クシテ大ヲ措キ小ヲ取り、一々皆不痛不痒ノ世界トナレリ。今夫レ如此、束手シテ冠ヲ待タンカ』と云ふ在上に對する不諱の語があつたのを唯一の材料として、死刑に處すべく判決文が出来上り、之が老中水野越前守の手許へ達した時、水野は死刑の二字

を削除し、上欄へ蟄居と朱書したのであつた。眞に危機一髮、崋山の運命は風前の燈であつた。水野が如何にして斯様の處置を取つたかと言ふと、崋山の師碩儒松崎懺堂が水野の臣小田切要助に依つて痛切なる陳情書を送り、救解したに依つたものである。當時蝶蝶の如き日本國は知らず、の間に殺ぐるみ國際的の金網の上に於て鎖國の口を密閉しつゝ、焼かれて仕舞ふべき運命に在つたとも見るべく、内外情勢を見透ふせる崋山其人の如き先覺者があり、警告を與へたればこそ其厄を免がれたとも見るべく、憂世慨國の愛國者として崋山の存在は日本開國史の上に特筆大書すべきものであつた。

至孝と友情

二十年間宿痾に苦しんだ崑山の父定通は赤負の爲め醫藥も榮養食も充分給するに由なく、眞に貧病苦の家庭であつたが、崑山は毎日夕刻御殿より退下せると病父の肩を揉むことを日課とし、相當の年輩地位に達しても尙此肩揉は廢さなかつたことが崑山自記の記録の内に見へて居る。寢るに蒲團も無い母が僅か一貫文の南鐐を借らんが爲めに雪の夜三宅坂から本所まで出掛けて不成功で歸つて來たといふ様な家庭に於て或は寺へ或は他藩士の家へ養子にやつた弟達が故障で歸つて來る、母の父河村彦左衛門が剛直な武士氣質から藩を離れて浪人となり家族一同で此貧苦の渡邊家へ乗込んで厄介になつたなど重なる不運と生活苦は又形容すべき辭も無い程であつたが其間に於て崑山は何の焦心も煩悶も無く和氣霽々最善の努力を傾注して一々適當の處置を爲し貧を救はんが爲めに愈々彩筆を呵して夜の目も寢ずに描き上げる作品は惣て衣食の

資となり饑餓を凌ぐことを得次第に陽春と青雲とを望むの境に達したが其間に於ても平素出入せし魚屋の乞食となり小供に手を引かれて門邊に立れるを見て資を與へて元の魚商に返らしめ其禮にとて鮮魚を携へ恩を謝するに及んでは之を受けず價を取らして買取り更に開店祝ひなりとて其鮮魚を其儘與へて感泣せしめ、魚屋をして先生は人に非らず神様なりと言はしめるに至つた如き眞に人間味の至情の發露で其間何等見榮へとか街氣とかいふ様な挾雜物の無かつたことは明瞭である。又不幸なる弟三人の爲めに傾盡した崑山の友情は總て涙なくしては見られぬ悲劇史であつた。

門人に對する篤誼

椿椿山は元金陵の門人で同門の畫友であつたが、金陵の死後椿山は強ひて乞ふて崑山の門人となり崑山の疑獄に際しては心血を澆ひで崑山の救解運動に狂奔し崑山の死後は遺族の世話に親身も及ばぬ親切を盡し崑山の二男小華を引取つて愛育し特に其畫道については椿山得意の惲南田の畫風を傳へ又其養女須磨子を娶はし二代の小華山と爲るを得せしめた程誠忠熱情の結晶とも見るべき美談の持主であるが、椿山をして斯くまでに至らしめた崑山平素に於ける至情と篤誼の程も推測に値ひする。崑山と椿山とは先生と門人の間柄であるが其相敬愛尊重せる所は格別の心友と見るべきであつた。繪事に關し又人間精神の持方に就ひて崑山が椿山を啓發指導したことも亦尋常一様の事ではなかつた。其他の門人半香、齋、齋等に對する指導と篤誼の情も亦皆崑山の博愛至誠の流露として景仰すべきものであつた。

經世濟民の經綸

崑山は殖産家で知られた大藏永常を田原藩の囑託として招き藩士の屯田策に資せしめた。一萬二千石の小藩田原は其譜第の大名としての資格と石高と一致せず、財政の窮迫は當然のことであり藩士の祿高も百石と言ふも實高は七八十石に過ぎず到底藩士の生活を保證することは出来なかつたので、大いに自給自足の道を講じ、藩士の内輕輩は皆農を副業とし味噌溜りの製造から棉花を栽培して綿を採り糸を製し織つて綿布となし衣類、寢具等全部手製に依つて自給し、又砂糖を造り櫛を植へて蠟を製し床下の土を利用して硝石を取り火薬を製造するなど出来るだけの事を爲し、又野菜果實を栽培し漁撈に依つて魚類を得、副食物は概ね自給に依つて補給せし如きそれら、其必要を充たすことに努めたのであつた。又宇宙混同秘策で有名であつた佐藤信淵を拉し來つて田畷行事と稱し農事改良に努めしめ、又藩主に勸めて報民倉なる備荒貯蓄の倉庫を

設け、自から卒先して作畫の潤筆料を寄附し終に寄附に依つて貯米を充實せしむるに至つた。田原藩領は渥美半島の大半に亘り南一帯は太平洋に面して居り暴風雨時難破船も少なくなかつたが嘗て紀州船の難破した時積載品の漂着したるを平素の慣習として沿岸漁氏は之を拾得したのであるが端なくも紀州藩との問題を惹起し漁村も藩當局も爲す所を知らず非常の難問題に逢着したが事あれば崑山を煩はすより外には無いので此時も亦結極崑山の救解に依存することゝなつた。此任に當つた崑山は豫ねて懇意にせる紀州藩の外交係と會談し談笑の間に解決を告げた。漁民は之を徳とし金若干を集め總代を上京せしめて崑山に贈呈し謝意を表せんとしたが、崑山は之を受取り其儘村方に於て保管せしめ饑饉の際など救済費に充しむることにした。

所が天保七年の凶年に際し領内の恐慌状態は非常であつた。之が爲め特に藩地に歸つた藩主康直は事の重大なるを見、崑山に非らざれば處理に當るべき人無しと思惟し急遽藩老を上京せしめ崑山の歸田を促がした。時に崑山は重

病に罹かり病褥に在り到底歸藩不可能なるにより同志の心友眞木重郎兵衛定前を推薦し救荒總指揮官として歸藩せしむることゝし同時に「凶荒心得書」を草して之を在田原の藩主康直に送つた。其概要に曰く。

人君必御行可被成事目

一、御恐懼御修省之事

凡て世に恐るべく憂ふべき事多く候得共凶饉程甚だしきは無之候。人にとりては命脈の危きが如く草木にとりては其根枯稿仕候如く、國に取りては存亡之機に御座候得ば人君に在りては恐れても懼るべく不致而は相ならざる事に候。聖代といへども水旱の變有之、人君御方寸の實否誠に御領中幾萬人の安危に拘はり候。依而御領中に罷在候數萬人の内、たとへいかに賤敷小民たりとも一人にても餓死流亡に及び候はば人君の大罪にて候

(中略)

君君の職を盡し候へば、臣其臣の職を盡し候故、第一には君の御職を御盡し

可有之候。柳も君の職と申すは此民有つて此君有之天理にて此君ありて此民有之節には無之候。この故に人君たるものは社稷に死すと申儀誠に當然の理にて候。湯王は早魃の時身を致して天に祈り候。如此明白なる道理有之候而も夫は書物の上それは昔話と心にも感動せざる君は眞に暗愚に非らざれば大悪人にて必らず天道に見かぎられ候人と可被思召依て先づ天の此民を生ずる所以公儀より此國人を封ぜられ候處を御勘考被遊候はゞ片時も御安心被遊間敷又流離轉死の者有之候ては忽ち御領地の御減と相成り烈火の御身に通り候如く何を差て置候ても防禦の御手段無之ては申さば御身不知と申者にて候。然る上は晝夜御他念無之御身命を御抛ち殊に御慎戒を御加へ被遊仰天伏地唯吾民の安堵を御祈り候はゞ御至誠神に感じ共應驗可有之候。猶又深く御思慮を勞せられ己下之條目に依りて御工夫可被爲在候。

一、御膳を御減御遊樂を御慎被遊候事

民は國の本。民有つて御一家の立つ義は申す迄も無之候得ば先被召上候一粒の御米より何不自由なく御榮耀被遊候事皆此民の力にて候。然れば一粒の米より事々物々其力を思召候からにはかゝる時御食之味有之筈は無之まして御遊樂がましき義被遊候事御心安かるべき筋には無之候。君の尊く重く、民の輕き義は常の事に候。若し凶饑非常の時は之に反し君輕く民重く候故に御制禁の御滯邑すら御願の通り被仰付又急の御暇も賜はり候程の御義に候間これ等を深く御味ひ被遊凶荒の時民の重き義御亮察可被遊候。

一、御人選被仰出候事(略)

一、御園米御開き早々御救可被成事(略)

一、救荒評議の書を御熟覽の上御撰被遊能く其諫に御従ひ被成候事(略)

一、御積藏を發し民を厚く被遊候事

一國一郡の主たるもの寶多く御所持候内民より尊き御至寶無之其至寶の

損傷可致時にあたり候にはたとへ御重代の金玉たりとも鈞合可相成ものに無之候間、愈不可救急に當り候はゞ御秘藏のもの不殘御差出米穀にかえ御救可被遊候。少しも御吝惜之御念被爲在間敷候。是則御方寸御一念之有無によりて下萬民の安危は顯然と相定まり候事故御恐懼御修省第一の義と奉存候

家老心得之事

一、調變を以て己が責任と爲す事

天下は天に代り諸侯は天下に代り、老臣職たるものは君に代り其大小は有之候得共、國人を平治致すに至りては變り無之候。其實は皆天に代り造化の窮を補ひ萬民を救ひ候事にて堯舜禹湯之御心といへども此心は二無之候。然るに今天下泰平にして世祿世官の家多く何心も無く古格舊例にさへ相隨ひ候得ば世並の事に相心得、左様なる大道は聖賢の上にて昔話の如く思ひ捨内省の實無之が故大變に當りても終に其智力を用いるすべを求

め候心も不付、唯々當惑のみ先に立て其本に反ると申事無之、其心に不慈が無之候とも其暗明によりて終に萬民の大害に相成候。誠に可恐次第に候。上に在る役人すら如此下に在る役人は猶更絶計の至りに候。是によりて救荒の策は常々の心掛けに在りて其時に臨みては迎も致方無之に付、先背水の戰場と心得、討死の覺悟可有之候。(調變とは陰陽を調理する事略)

一、飢溺を以て己が任と爲す事

任は物を負載する事にて其物損傷せば之を負ふ者の罪也(略)

一、君に敬畏の心を啓かしむる事

君たるもの民に非らざれば邦を守る事不能、可畏可敬の至りに候(略)

一、社稷顛危の漸を慮る事

凶荒の時、民一人にても流離轉死に及び候得ば一人だけの田畑は荒廢致候。仁君は天の如き故一人辜ある 朕の身に在りとして念々民を不忘其餘申す迄も無之候。

斯くて天保九年に至り幕府は特に左の褒詞を田原藩に下して救荒に關する田原藩の功績を表彰した。

三宅土佐守

其方領分去々申年は不運違作之處窮民救方手當等格別行届條由相聞一段の事に候。此段可申聞旨御沙汰に候。

救荒に關する赤心を罩めた峯山の救荒心得は藩主を動かし其命令は當局藩士等をして誠實に奉行せしめたで有らうが現地司令官であつた眞木定前の努力も一方ならぬものが有つたと思はれる。

峯山の救荒心得は單に救荒心得では無く施政上の大經綸であり王道の眞髓を説いたもので如何に經世濟民の道に専念し徹底して居たかゞ窺はれる。

古今獨歩の畫聖

峯山は萬能の人、書畫詩文和歌俳句狂歌等才鋒繼横手に従つて成るの觀があり殊に書畫の如き如何なる雜記斷簡零墨と雖も拙なるものゝ一つも存在しないことは驚くべきもので畫に至つては我國に於て古今獨歩と言ふも過褒では無からう。尤も南畫には雪舟雪村あり狩野派には山樂あり土佐派には探幽あり、九山派には應舉あり、大和繪には又兵衛あり、現代は又現代としての進境と時代の特色を持つた大家が在るには有るが、峯山の如き學殖と氣品と技術とを兼ね備へた高き人格の處産としての名畫が何處に在るか。綜合した天稟的價値に於て之を古今獨歩と稱しても決して誇張の辭とは思はれない。書に於ても幾多古今の大家を超越して直ちに宋元巨匠の壘に迫るものがあつた。

繪事と治道

崑山の退役願書の一節に曰く。

一、唯繪事にて推謀り存候に、畫事すら第一の心と申ものに志一途に立不申候ては物の形の調ひ候て落なく見事には出来不申候。又心斗り矢竹に存込候とて手も又心の通りに動き不申候ては畫成り不申候。又心手計自由に相成候とてそれにて畫出来候と申には参り不申、胴體四支治り不申候ては机に向ひ腹より溢れ出候様に存込不申ては出来不申候。依之惣身の内髪、先爪の端迄皆畫に相成候様仕事にて候。素人より申せば爪先髪、毛の畫に用は無之と可存候得共。髪を結ひて腦上快然と相成爪を取て手を奇麗に不仕候ては繪の具をこなし候事も出来不申候。己に古人も明窓淨几は書の合、風雨擾雜は書の乖と申身外のものすべて如此まして總身の内猶更に御座候。畫工にして畫に志し不申書家にして書に心無きは、何以て生

活致べきや。今の諸侯如何にや。諸侯にして國を治めずして家中百姓に出精致たせと令し候とて服従可仕もの可有之乎。又奉行にして奉行だけの事を盡し不申して百姓は百姓だけを盡し不申とて令し候ても猶更承知不仕候。右は職に一致不仕候譬へに御座候。又四民に分ち申せば士は三民を治る職に御座候故御家中誰彼となく治安に心を用ひ候はねば跡の三民は治不申候。然らば上よりして下足輕に至るまで治安に志無之ては何事も出来不申如く繪事も右の通りと相心得候共治道の事は如何のことや、審に辨へ不申候。左様に御座候得は畫事も治道も一理にして二理無之候間、畫道を以て治道に試み可申とあらんには随分試可申候(後略)。

之は藩主並に家老等に對し畫道を以て治道を説ひた崑山經綸の一つであるが、其作畫に於ける崑山の用意と實行とは此心境に於て全力を傾注したもので、大自然を捉へ來つて其一瞥の彩筆に驅使擒縱した崑山繪事上の神枝は斯くして存在したのである。

附 録
華 山 と 耀 藏 の 詩

一世の偉人にして先覺者であつた崋山を構陷し羅織し死に致さんとした町奉行鳥居甲斐守耀藏は如何なる人物で又其後どうなつたかと言ふと、彼れは幕府の儒者大學頭林述齋の第二子で鳥居一學の嗣子となり水野越前守の信任を得て飛ぶ鳥も落さんばかりの勢ひで權謀術數を縦しいまゝにし奸曲を以て知られて居たが、彼れは崋山の死後四年目の弘化二年十月其積惡の清算として處罰され讃岐丸龜の京極藩にお預けとなり、御用屋敷に幽囚の身となり二十六年間を禁獄裡に送り明治四年廢藩置縣の際放免せられ、上京して舊友を訪ふたが誰一人相手にする者無く憐れはか無き落泊の身となり駿河に到り林本家に寓し明治七年十月三日淋しく没した。彼れが牢番の藩士に與へた扇面に「交市通商競若狂。誰知胡虜有深謀。後五十年須見得。神州恐是作夷郷。」七十三老人鳥居耀と有るを見れば彼れの死は八十歳前後で有らう。

鳥居の罪狀は渡邊崋山高島長英の構陷羅織高島秋帆を叛逆罪に問ひ、町奉行矢部駿河守を陥れ家斷絶せしめ、井上傳兵衛の事件等幾多の罪狀が有つたが

いづれも法的の行爲で之を以て彼れを處斷することは出来憎いので寧ろ枝葉末節の雜々たる行爲中より不穩當なる違法の處置と見るべき點を列舉し斷罪の資料として居るが其積惡の報ひは水野越前守の失脚と同時に行はれたのであつた。遮莫二十六年間の幽囚人間として何を意味したか唯因果應報の天罰として深刻なる清算であり崋山の神格に比し餘りにも霄壤の差であることが思はれる。崋山先生は死して永久に生き耀藏は死せずして檻中の豚となつた。我等は大自然の神裁の如何に嚴肅にして公明なるかを今更ながら痛感するものである。さあれ耀藏も亦林家の二男として相當の學殖と文字は有つたらしく幽居中の詩が残つて居る。正奸黑白絶對對照の崋山と耀藏の詩を茲に併録する。泥棒にも三分の言ひ分あり耀藏には又耀藏としての述懐がある。栗本鋤雲は耀藏の事を刑場の犬と言つたが耀藏は憂國者を以て任じて居り比干岳飛に比して居た所滑稽である。

崋山の詩

○

莫嗤鷓鴣試鵬雲。 決起槍榆初見分。

游子固知風木歎。 花朝月夕何忘君。

嗤ふ莫れ鷓鴣の鵬雲を試むるを。決起槍榆初めて分を見る。游子固より知る風木の歎。花朝月夕何んぞ君を忘れん。

○二十六歳脱藩西遊を思ひ立ちたる時の述懐。鷓鴣はみそさよい。槍榆は日の没する所。

中秋歩月

俗吏難與意。 孤行却自憐。 松林黑干墨。 江水白於天。
樓遠唯看燭。 域高半帶雲。 不知今夜月。 偏照綺羅筵。
俗吏意を與にし難し。孤行却つて自ら憐む。松林墨よりも黒く。江水天よりも白し。樓は遠く唯燭を看

城は高く半ば雲を帯ぶ。知らず今夜の月。偏へに照らす綺羅の筵。

○和田倉門の勤衛の夜將軍家齊を冷罵したるの詩。

題機女之圖

青燈映幃幕。絡繹鳴井欄。軋々揮素手。風露凄已寒。
辛勤度幾梭。始復成一端。寄言羅綺伴。當念麻苧單。
青燈幃幕に映し。絡繹井欄鳴る。軋々素手を揮ひ。風露凄として已に寒く。辛勤幾梭度る。始めて復一端を成す。言を寄す羅綺の伴。當さに麻苧の單を念ふべし。

題畫山水

雨晴前山竹樹邨。石溪流水帶沙洋。

野人赤脚如歸鳥。不怕深泥半擁門。

雨は晴る前山竹樹の邨。石溪流水沙洋を帶ぶ。野人赤脚歸鳥の如く。怕れず深泥半ば門を擁するを。

同

池塘春暖水紋開。堤柳毛絲問野梅。

江上年々芽意早。蓬流春色逐潮來。

池塘春暖水紋開き。堤柳毛絲野梅を問ふ。江上年々芽意早く。蓬流春色潮を逐うて來る。

同

燈光難照客懷開。忽聽寒聲響似雷。

天氣無風樹無葉。道州半夜水流來。

燈光照し難く客懷開く。忽ち聽く寒聲響き雷に似たり。天氣風無く樹葉無し。道州半夜水流來る。

同

秋山瘦嶺岫。秋水渺無津。如何茅店裏。却欠倚欄人。

秋山嶺岫瘦せ。秋水渺として津無し。如何ぞ茅店の裏。却つて倚欄の人を缺く。

題桃之圖

噴日舒紅景。通溪茂綠陰。終期王母摘。不羨武陵源。

噴日紅景を舒し。通溪綠陰茂る。終に王母の摘まんことを期し。羨まず。武陵の源。

題錦鱗青蓮圖

秋水澄鮮見髮毛。錦鱗行處水紋搖。
岸邊人影還驚去。時向綠荷深處跳。

秋水澄鮮髮毛を見る。錦鱗行く處水紋揺らぐ。岸邊の人影に還驚き去り。時に綠荷深き處に向つて跳る

題點鼠食葡萄之圖

點鼠窺百果。覆藏因農憂。天行固難料。人豈不綢繆。

點鼠百果を窺ふ。覆藏は農憂に因る。天行固料り難し。人豈綢繆せざらんや。
洋夷我國を窺ふを諷す。

○

宮中一出草蟲早。何事使人感慨長。

忽怕朝衣立窓下。秋風吹散御爐香。

宮中一たび出れば草蟲早し。何事ぞ人をして感慨長からしむ。忽ち怕る朝衣窓下に立てば。秋風吹散御
爐の香。

○

丹青影裏放遍舟。山水都從枕上游。

圻草沿流綠無縫。遙村點染露紅樓。

丹青影裏遍舟を放つ。山水都べて上游に枕む。圻草流に沿うて綠縫ふ無く。遙村點染紅樓を露はす。

贈村松大夫題松竹圖

世上群葩醉暖風。江頭唯見獨醒公。

誰憐一樹雪霜後。貞固正兼松柏同。

世上群葩暖風に醉ふ。江頭唯見獨醒公。誰か憐む一樹雪霜の後。貞固正さに兼ぬ松柏と同じ。

與春山

明々城上月。忽有故人來。白酒猶歡醉。青燈更苦吟。

鑿開渾沌竅。默會聖賢心。自不鐘子聽。誰知伯牙琴。

明々城上の月。忽ち故人の來る有り。白酒猶歡醉し。青燈更に苦吟す。鑿開渾沌の竅。默會す聖賢の
心。鐘子の聽くに非らざるよりは。誰れか伯牙の琴を知らん。

○伯牙琴を彈ずれば鐘期聽いて能く解す。鐘子期は春山、伯牙は自分のこと、心會默契の情想ふべし。

述懷

鄭老畫蘭不畫土。有爲者必有不爲。
醉來寫竹似芦葉。不作鷗波無節枝。

鄭老蘭を畫いて土を畫かず。爲す有る者は必らず爲さざる有り。醉來竹を寫す芦葉に似たり。作らず鷗波無節の枝。

○鄭老は鄭板橋、鷗波は趙子昂、土は元の國土なるが故に畫かず宋の爲めに節を守る。子昂の竹は枝に節も無く其人元に降つて節操も無い。三宅家繼嗣問題につき其心節を漏らしたる詩なり。

幽居

多難畏事眉山老。扁戶沈々甘晏如。
倥偬營房蜂影亂。檀欒護穉竹陰舒。
新知翠嶺紗牕畫。舊夢紅塵酒友書。
獨幸春風無棄我。好鳥幽芳遠茅廬。

多難事を畏る眉山老。扁戶沈々晏如に甘んず。倥偬房を營む蜂影亂れ。檀欒穉を護つて竹陰舒ぶ。新知翠嶺紗牕の畫。舊夢紅塵酒友の書。獨幸とす春風の我を棄る無きを。好鳥幽芳茅廬を遠る。

○

濤聲滂湃繞孤城。海國喧寒陰又晴。
畏濕蝶衣困露葉。乘乾蛛網撒簷檣。
樊禽何學豐干舌。池水恰如魏野清。
三歲一經營樂地。宜寂寥以送餘生。

濤聲滂湃孤城を繞り。海國喧寒陰又晴。濕を畏るの蝶衣露葉に困しみ。乾に乗ずるの蛛網簷檣に撒す。樊禽何んぞ學ばん豐干の舌。池水恰も魏野の清の如し。三歲一たび經營樂地。寂寥宜しく以つて餘生を送るべし。

○

複嶺重雲絕友期。中襟鬱塞有誰知。
一花落盡豈無數。百鳥和鳴如感時。
送歲隣翁愛幽獨。折花野老慰愁眉。
樸方雖沒驚人句。滿胸隱憂杜老詩。

復嶺重雲友期を絶し。中襟鬱塞誰れか知る有らん。一花零落豈數無からん。百鳥和鳴時を感ずるが如し。巖を送るの隣翁幽獨を愛し。花を折るの野老愁眉を慰む。樸方人を驚かすの句無しと雖も。滿胸の隱憂杜老の詩。

杜老は杜子美。

○

海雨洗塵埃。蟾光滿谷垠。及勝諸夜耀。豈望正秋輪。
寒草臥無影。霜蟲老尙呻。何客不腸斷。況又此愁人。

海雨塵埃を洗ひ。蟾光谷垠に滿つ。勝とするに及ぶ諸夜の耀。豈望まん正秋の輪。寒草臥して影無く。霜蟲老て尙呻す。何の客か腸斷せざらん。況んや又此の愁人をや。

蟾光は月の光り。

○

人間喧聲裡。幽子步寒煙。千里朋無至。九天有月憐。
更闌思益遠。窮極志彌堅。塵世君休説。氷輪有缺圓。

人間喧聲の裡。幽子寒煙に歩す。千里朋の至る無く。九天月の憐む有り。更闌けて思益す遠く。窮極ま

つて志彌よ堅し。塵世君説くを休めよ。氷輪缺圓有り。

○

吟策繞幽圃。歸來坐短檠。霜簑占空影。寒蟋領園聲。
硯滴銀河水。詩分玉兔精。此皆閑寂得。回首笑塵纓。

吟策幽圃を繞り。歸來短檠に坐す。霜簑空影を占め。寒蟋園聲を領す。硯滴は銀河の水。詩は玉兔の精を分つ。此れ皆閑寂に得。首を回らして塵纓を笑ふ。塵纓は俗吏人爵の徒。

寄椿山

月祭有前後。此鄉唯季秋。北隣餽餠餅。南田掘芋頭。
穉子做膜拜。老妻獻素羞。事宜從境俗。弄霽獨悠々。

月祭前後有り。此郷唯季秋。北隣餠餅を餽り。南田芋頭を掘る。穉子膜拜に做ひ。老妻素羞を獻す。事宜しく境俗に従ふべく。晴を弄し獨り悠々。

幽居日歷

辛丑(天保十二年)元旦早起自汲盥。拜家廟。進辛盤。獻壽盃。賀慈親。慈親榮七十。予四十九婦三十六。兒立十譜七。女葛十六。闔家無故。誠天樂也。此日詩二首。

萬莖烟裏海噉紅。 投刺飛驒西又東。
滾々馬聲皆醉夢。 今朝眞個迎春風。

○ 萬莖烟裡海噉紅なり。刺を投ずるの飛驒西又東。滾々たる馬聲皆醉夢。今朝眞個春風を迎ふ。

四十九年官道榜。 昨非不改耻衛遼。
只知樂有超人處。 七十萱堂數架書。

○ 四十九年官道榜なり。昨非改めず衛遼に耻づ。只知る樂しきは超人の處にあり。七十の萱堂數架の書。
○ 轉句一に『天下難遇只天樂』とあり、全集寫眞版の眞筆はそれである。當初此句を草し直ちに揮毫し
後に『只知樂有超人處』と改めたので有らうか。

鳥居耀藏の詩

得罪赴四州

一 謫零丁赴四州。 嶺雲關雪路悠々。
元期爲國除流弊。 豈料斯身招狂尤。
橋梓生離時泣血。 水魚恩遇忽消漚。
人間誰得能無異。 但見丹心竹帛留。

一 謫零丁四州に赴く。嶺雲關雪路修々。元期す國の爲めに流弊を除かんことを。豈料らんや斯身狂尤を招く。橋梓生離時に血に泣き水魚恩遇忽消漚す。人間誰れか能く異無きを得んや。但だ見る丹心竹帛に留むるを。

○ 棄官豈料又爲囚。 繫獄尙懷杞國憂。

兔死狗烹何足怪。 功成名遂孰能儔。
弟兄別苦腸中熱。 兒女啼聲耳底留。
唯有「一條遺恨在」。 君恩海岳未曾酬。

官を棄つ豈料らんや又囚と爲る。鑿獄尙懷く杞國憂へ。兔死して狗烹らる何んぞ怪しむに足らん。功成り名遂ぐ孰れか能く儔する。弟兄別苦腸中の熱。兒女啼聲耳底に留まる。唯一條遺恨の在る有り。君恩海岳未だ曾て酬ひず。

述 懷

十歲妨賢路。一朝棄聖君。獄中無筆硯。腹裏構詩文。
頸節風前草。關情月下雲。士師漫督責。哀曲不敢聞。
十歲賢路を妨げ。一朝聖君を棄つ。獄中筆硯無く。腹裏詩文を構す。頸節風前草。關情月下の雲。士師漫に督責。哀曲敢へて聞かず。

碌々唯慙誹素喰。 孜孜只欲報朝恩。

翱翔會類鷗。驅雀。 殺棘今同羊觸燔。
一世誰憐下和泣。 孤忠甘受岳飛冤。
丈夫許國心如鉄。 非計全軀爲子孫。
碌々唯慙つ素喰の誹。孜孜只朝恩に報いと欲す。翱翔會て類す鷗の雀を驅るを。殺棘今は同じ羊燔に觸る。一世誰れか憐れまん下和の泣くを。孤忠甘んじて受く岳飛の冤。丈夫國に許す心鐵の如し。軀を全うし子孫の爲めに計るに非らず。

勢位相爭各逞功。 雲烟變幻實無窮。
四民漫仰寬濟日。 一世誰知姦似忠。
忽使講文廣武俗。 變爲巧言令色風。
向人休說邦家事。 總出相侯方寸中。

勢位相爭ひ各功を逞うす。雲烟變幻實に窮り無し。四民漫に仰ぐ寬濟の日。一世誰か知らん姦の忠に似たるを。忽ち講文廣武の俗をして、變じて巧言令色の風たらしむ。人に向つて説くを休めよ邦家の事。總べて出づ相侯方寸の中。

牢屋何堪暑苦煨。 自憐老懶日相催。
此中莫歎無知己。 時有清風入牕來。
十歲承恩班聖朝。 豈圖失脚復無聊。

牢屋何んぞ堪へん暑苦の煨はだしき。自から憐れむ老懶日に相催うす。此中歎する莫れ知己無きを。時に清風有て牕に入り來る。十歳恩を承け聖朝に班す。豈圖らんや失脚復無聊。

雨後山行

趁晴試欲上前山。 身與弧筇共一閑。
驟暖催花紅滿樹。 漲波侵杓緣平灣。
人寰漸遠禽多語。 佛塔遙看僧獨還。
日暮回頭經觀處。 雲烟鎖在有無間。

晴を趁うて試みに前山に上らんと欲す。身は孤筇と共に一閑。驟暖花を催ふし紅樹に滿ち。漲波侵杓平灣に緣る。人寰漸やく遠く禽に語多く。佛塔遙に看る僧の獨還るを。日暮頭を回らす經觀の處。雲烟鎖ざして有無の間に在り。

獄中の構想なるべし。

聞濱松宰相得罪賜老惻然有詩

甘爲邦家諂禍機。 丈夫志亦作雄飛。
切方管樂元無耻。 忠比邊干亦不遇。
空呵打龍擒鳳力。 終羅鎖骨傑肉織。
從今柱石知誰在。 長使吾儕淚濕衣。

甘んじて邦家の爲め禍機を諂す。丈夫志亦雄飛を作す。切に管樂に方り元耻無し。忠は邊干に比し亦不遇。空しく打龍擒鳳の力を呵し。終に鎖骨傑肉を羅織す。今從り柱石誰か知るを知らん。長く吾儕をして涙衣を濕はしむ。

十三夜賞月

人々爭賞月方佳。 獨背清光手自叉。
若無盛饌憐孤寂。 何識楚囚無告軀。
人々爭ひ賞す月方さに佳きを。獨り清光に背ひて手自から叉す。若し盛饌孤寂を憐むなくんば。何ぞ識

らん楚囚無告の軀。

○
雖值良宵無取親。陰蟲空伴苦吟身。
遙思兄弟蓋簪處。共攬清輝欠一人。
良宵に值うと雖も親しむ所無し。陰蟲空しく伴ふ苦吟の身。遙かに思ふ兄弟蓋簪の處。共に清輝を攬つて一人を缺く。

○
孤坐無言空咨嗟。意中靡日不思家。

何堪病鬼頻來責。兩耳蟬鳴眼發花。

孤坐言無く空しく咨嗟す。意中日として家を思はざる靡し。何んぞ堪へん病鬼頻りに來り責む。兩耳蟬鳴眼花を發す。

獄中書懷

除弊布新政。推賢先世憂。豈圖報國志。終作誤身媒。

何堪想思切。誰憐生別哀。瀟々滿檐雨。雲霧幾時開。

除弊新政を布き。賢を推し世憂に先んず。豈圖らんや報國の志。終に身を誤るの媒と作る。何んぞ堪ん想思の切、誰か憐まん生別の哀。瀟々滿檐の雨。雲霧幾時開かく。

冬夜

吹面霜風似有稜。夜寒月色倍清澄。

唯疑鳧雁聲方少。初識園池已結氷。

面を吹く霜風稜有るに似たり。夜は寒く月色倍すく清澄。唯疑ふ鳧雁聲方さに少なく。初めて識る園池已に結氷。

昭和十六年二月十日印刷
昭和十六年二月十五日發行

先覺者渡邊崋山

定價金六拾錢

複製

著者

鈴木清節

豐橋市鍛冶町三十九番地

發行者

山本一郎

不許

印刷者

中尾五郎

名古屋市中區千早町五丁目一六

豐橋市鍛冶町三十九番地

發行所

華山叢書出版會

東京市神田區錦町三百二十番地

發賣元

育生社

一 誠 社 印 刷

終

華山叢書出版會發行